



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	繋がらない個人のために : ゴフマン『スティグマの社会学』再考
Author(s)	宮内, 洋
Citation	北海道大學教育學部紀要, 65, 233-244
Issue Date	1995-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29454
Type	departmental bulletin paper
File Information	65_P233-244.pdf



繋がらない個人のために

— ゴフマン『スティグマの社会学』再考 —

宮 内 洋

Reconsidering the individual on the text “Stigma” of Goffman : Notes about a single cell in “our” society

Hiroshi MIYAUCHI

1) はじめに⁽¹⁾

アーヴィング・ゴフマンによって1963年に出版された『スティグマの社会学 (Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity)』⁽²⁾は、日本においてもスティグマ論の古典として今もなお数多く引用されている。しかし、そのような場で流通している『スティグマの社会学』は、ほとんどの場合ある一定のスタイルを保持している。つまり、当該社会から差別される存在である個人が「パッシング (passing)」や「カヴァリング (covering)」によって自らの情報を操作している部分のみがクローズ・アップされ、それがゴフマンの「スティグマ論」としてパッケージングされて流通しているかのように見える。「スティグマのある人」とは実は「私たち」すべてのことなのであるという、どんでん返しが結末付近で用意されていることなどなかったかの様相である。その日常生活での相互作用場面における情報操作のテクニック一覧は今なお魅力的であろうが、それらはゴフマンが提示したパラダイムに則してこそ初めて意味をもち得るのではないかと考えられる。私たちが、ゴフマンから継承するのは単なる「技法」の問題ではないのではなかろうか。

そのことを十分に確認したうえで、自ら編み出した技法を駆使して情報操作と緊張緩和を行うゴフマンの描く「スティグマのある人」に改めて焦点を当ててみる。私たちは、その個人像に共感を覚える自分を見つけはしないだろうか。すなわち、「組合 (クミアイ) なんてダサイ」と感じ参加することなんて考えられない等といった、「他人と“連帯”なんてできやしない」⁽³⁾とと思っている私たちにとって、『スティグマの社会学』に出てくる個人像は、日常生活における私たち自身の姿と重なり合う部分が実に多いように感じられる⁽⁴⁾。逆の視点から見ると、『スティグマの社会学』で描かれた個人像を検討することによって、私たちの置かれている状態が浮きぼりにされる可能性が秘められているのかもしれない。

註

- (1) 本稿は、1992年に開かれた日本社会教育学会・日本教育社会学会第16回東北・北海道研究集会にて報告した「ゴフマンの『スティグマ論』再生—エスニシティ研究との関わりにおいて—」の発表原稿の一部を基にしており、これに大幅に加筆、補正を行ったものである。
- (2) 本稿においてはPrentice-Hall Inc.から出版された初版をテキストとしている。また邦訳書については、1970年に石黒毅氏によって、せりか書房から出版されており、1980年に同氏による再版

が同社から出版されている。本稿においては、1987年に出版された再版を参照した。ただし、テキストの引用部分については、筆者によって訳語及び訳文を大幅に変えた箇所もある。

- (3) 今なお氾濫する「ネットワーク」という用語は、かつての「連帯」等の言葉の単なる言い換えに過ぎないという指摘をよく見かけるが、「ネットワーク」という用語を用いて、他者との繋がりに関する新たな意味付けを行ったものとして、金子郁容氏の一連の論稿が挙げられよう。
- (4) 焼肉店の看板の電球を点灯しただけで「非国民」と口々に言われた1989年初頭に起こった「女子高生コンクリート詰め殺人事件」（おんな通信社編，1990）の犯人の少年たちの関係、そして彼らを取り巻く周囲の関係（親子、夫婦、友人、仕事仲間、政治的同胞等）にも同質のものを筆者は見ると。

2) 『スティグマの社会学』の最終戦略——「ノーマルな人間」を探して——

a) ゴフマンにおける「スティグマ」

もともとギリシア語にその源を見つけることができるとされる「スティグマ」⁽¹⁾という用語が日本国内においても広く認知されるようになったのは、ゴフマンによる『スティグマの社会学』の影響が大であろう。この著書には、「スティグマ化が生じた現場に関する多くの事例」⁽²⁾が詰められている。その数多くの事例に出会っていくにしたがって、私たちは心穏やかにはいられなくなると同時に、何がこの社会においてスティグマとされているのか⁽³⁾、そして「スティグマがある人」とされる人物の感情の流れを手にすることになるのである。

では、その「スティグマ」とは一体どのようなものとして、ゴフマンは規定しているのだろうか。まずゴフマンは、スティグマには主なものとして以下の三つの種類があるとしている。すなわち、①「肉体のもつさまざまな醜悪さ (abominations of the body)」⁽⁴⁾、②「個人の性格上のさまざまな欠点 (blemishes of individual character)」⁽⁵⁾、③「人種、民族、宗教などという集団的スティグマ (the tribal stigma of race, nation, and religion)」⁽⁶⁾である。しかし、ゴフマンによるスティグマの概念においては、上記の三つの分類はさほど重要視されない。と言うのも、ゴフマンはそれらの中に同一の社会的特徴を見出すからである。つまり、「個人が、われわれの注意を惹き、出会った者の顔をそむけさせ、他の属性がわれわれにもつ要請はそれがあるため無視されるような、しかもそれさえなければ彼は問題なく通常の社会的交渉で受け容れるはずの一つの性質をもっている」⁽⁷⁾という特徴である。

さらに説明を試みるためには、ゴフマンの対面的相互作用に関する見解が必要となろう。ゴフマンは、私たちは面前にいる人に対して「こういう人でなければならない」という要求を知らぬ間に行っていると把握している。個人Aの生活史と密接に関連したアプリオリな特定の期待から負の方向に逸れてしまっている個人Bという、そのような両者が出会っている場面を想定すると、Bという個人はAにとっては「スティグマのある人」となる。ここでわかるとおり、この「スティグマ」とはAとBの関係を表現する言葉として機能している。つまり、ゴフマンにとっての「スティグマ」とは、固定された何らかの属性を意味する言葉ではなく、関係を表現する言葉なのである⁽⁸⁾。

註

(1) 「スティグマ」という言葉は、もともとギリシア人が用いた言葉であると言われている。それは肉

体上に刻みつけられるか、あるいは焼きつけられた徴を指し示す言葉であり、その徴を付けられた者は汚れた者、忌むべき者であることを周囲の者に知らしめるための徴であったと言われている。また一方で、キリスト教においては、神から選ばれた者の徴（聖痕）として崇められてもいる。今日の英語圏では、「スティグマ」という言葉は日常語としてしばしば用いられており、前者に近いネガティブな意味に用いられるのが一般的であろう。

(2) 坂本 (1986), 165 頁。

(3) 「この社会」とは、日本語で本文を読んでいる「私たち」の社会ではないことに注意しなければならない。この『スティグマの社会学』はスティグマ論の古典であることに間違いないだろうが、このテキストはまぎれもなく 20 世紀のアメリカ合衆国（特に 1950 年代）という一つのローカルな文脈に依存したものである。ゆえに、読者側の「この社会」、つまり「日本社会」におけるスティグマとは合致しない部分、《ズレ》が存在しているのは当然のこととなろう。すなわち、1990 年に杉野が看破したとおり、このゴフマンのスティグマ論は「アメリカ社会の文化に限定された民族誌の一つ」なのである。さらに別の観点から述べると、アメリカ中産階級に存在する忌むべき《恐怖》の集成体とも言えるのかもしれない。

そのことを考慮に入れたうえで、ゴフマンのスティグマ論は今もお色あせずに日本において読み続けられている。そこには、ゴフマンの戦略性が大いに働いていると考えられる。すなわち、これは杉野も指摘しているとおりだが、ゴフマンは「スティグマ」として一括して論じることが可能なほど類似した状況にあるとしながら、ほとんどの事例を身体障害者の心情吐露に頼っている（一冊を通して、およそ 110 ケース中、およそ 70 ケースも）。身体的部位の欠落感や不自由であることに規定された意識には、時間・空間を越えた人類共通の普遍性があるとでも言うかのようにである。そこで記述に共感する私たちは、まるで「私たちの」社会について語られているかのように受け容れ、ゴフマン・ワールドに浸ることができる。

(4) Goffman (1963), p.4. (訳書 14-15 頁)。

(5) *ibid.*, p.5. (訳書 15 頁)。

(6) *ibid.*, p.3. (訳書 12 頁)。「対他的な社会的アイデンティティ (a virtual social identity)」と「即自的な社会的アイデンティティ (an actual social identity)」との乖離を構成している要因とも定義されている。

b) ノーマルな人間 (The Normals)⁽¹⁾

ゴフマンは先のスティグマの三区分はほとんど問題とせずに、スティグマを一括して論じていった。各々のスティグマの個別の言及をほとんどしていないために、「スティグマのある人」と、対する「ノーマルな人 (the normals)」との関係というのが『スティグマの社会学』における基本的なパースペクティブとなっている。特に、2 章の「情報操作と個人的アイデンティティ」においては、この両者の対面的相互作用の実態が中心となって展開される。つまり、この両者のカテゴリー図式がまず存在しており、当該社会の構成員はどちらかに属していることを前提にして、これらの記述は成立しているというわけである。こうして執拗なまでに、「スティグマのある人」の「ノーマルな人」に対する自己呈示の技法の記述が繰り返される。これによって、読者はゴフマンの提示する「スティグマのある人」に対して、状況定義が自らでは行えないかのような、あまりにも脆いイメージをもつことだろう。さらに、3 章の「集団との関係とエゴ・アイデンティティ」においては、自らを取り囲む二つの集団、つまり彼／かの女と同じ境遇の人たちのカテゴ

リーと「ノーマルな人」たちが中心となって構成する社会の側（彼／かの女自身もその社会の正当な構成員でもあるのだが）からの両方向からメッセージに、引き裂かれそうになっている様が綴られる。

この時点で、社会運動に関心のある人たちの間からは、ゴフマンの提示する個人像があまりにもひ弱く脆いことに批判がなされることだろう。個人は社会に統制されたままの存在ではない、あるいは個人には自己革新性が秘められているはずだ、と。

しかし、ゴフマンはここでペンを置いたわけではない。上で述べられているような個人側からの反撃ではなく、もう一つの方向へと展開させていった。それは、ゴフマン自身による読者（および、その背景となっているはずの社会）に対する反撃なのかもしれない。人生の途中からもう一方のカテゴリーに移行した人たちの事例を出しながら、あらゆる個人にとって、自らが属してはいないと考える他方のカテゴリーに関してはまったく未知なるものではなく、実はよく見知っていたのではないかと問いかけるのである。こうして、今まで「ノーマルな人」というカテゴリーに属していた（はずの）個人にも、先の例におけるBの可能性が示唆されていくわけである。

そして、最終的にはゴフマンはこう言い切った。

スティグマとは、スティグマのある人とノーマルな人の二つのグループに区別することができるような具体的な一組の人間を意味するものではなく、広く行われている二つの役割による社会過程（a pervasive two-role social process）を意味しており、それも少なくともある人との関係や人生のいずれかの局面において、あらゆる人がその両方の役割で、この過程に参加しているのである⁽²⁾。

ゴフマンは象徴的に「スティグマのある人」と「ノーマルな人」という今まで述べてきたカテゴリーが実は「同じ標準という布からの端切れ」⁽³⁾ではないかという考えも示しさえしているのだが、彼にとって「スティグマのある人」と「ノーマルな人」というのは実際に存在する人間を意味してはいない。それらは、ある場面で産出された社会関係を説明するために切り取られた一部を表現する用語なのである。だから、場面が変われば、説明するにあたり表現するための用語も変わることになる⁽⁴⁾。

このゴフマンの提示したパースペクティブには、差別を論じたものの大半がつまらない、モラリティックなものに終始していることへの強烈な一撃が存在していると考えられる⁽⁵⁾。つまり、このゴフマンのパラダイムにおいては、「ノーマルな人」は「ノーマルな人」としていかなる場合も永続的に存在するという既存の理論に見られる非現実的な固定的な視点は解体されており、個人における「変動」をすでに内包している。同時に、「スティグマのある人」とされる人たちも、「スティグマのある人」としてのみすべてのライフ・ステージに立ち、一生を終えるわけではないことを教示されることとなるのである。すなわち、多数の「ノーマルな人」たちによって、絶対的な優位性が保証されていると考えている（日常生活においてはほとんど意識されない）基盤がいかに不安定で脆いものなのかということを露呈させたわけである。先にも見たように、これらの両者は単に「相互作用時における役割であって、具体的な個々人ではない」⁽⁶⁾とゴフマンは論を展開することによって、ある特定の属性によって「差別する者」と「差別される者」という固定した対立図式を前面に押し出したがゆえに、その対立図式に自ら身動きが取れなくなっていた従来の差別論を結果的に一蹴してしまったわけである。

「ノーマルな人間」というカテゴリーを仮に措定して論を進め、最後の最後で「ノーマルな人間」など存在しないことを述べて、根本から引っ繰り返ってしまうゴフマンであるが、この確信犯的な戦略を保留してしまっただけでは、ゴフマンの「スティグマ」の本質的な意味は逆に理解されてしまう恐れがあるだろう。この最終戦略を見逃しては、ゴフマンが「ノーマルな人」と同義語として並列に用いた“we”の真の意味が損なわれてしまい、まさにこの世は「ハーフ・ワールド」となってしまうだろう⁽⁷⁾。

註

- (1) 邦訳書においては、「常人」という訳語が用いられているが、本稿においては民俗学的な意味での誤解を恐れて敢えて「ノーマルな人」とした。現代社会においては、あらゆる意味において「ノーマルな人」などいない、というテレビ・ラジオ番組でお馴染みの言説を踏まえたものでもある。
- (2) Goffman (1963), pp.137-138. (訳書 225 頁)。ただし、下線は筆者。
- (3) ibid., p.130. (214 頁)。
- (4) このようなコンテクスチュアルな役割関係論的パースペクティブは、差別—被差別関係において考えると、従来のラベリング論などに見られる固定した視点を越えた点として評価されるものである。
- (5) 既存の差別論に対しては、以下の批判で十分に論破することができるのではないだろうか。同時に差別論のみならず、「学問知」自体も再考を促されることになるだろう。

「今ある差別論が、総じておもしろくないのは、そこだと思うんです。差別論をやればやるほど、「常識」に内在する「差別性」、“排除する装置”を正当化してしまう。

——現在のところ差別論は、一般的にいうと、ある理論を立てて、その理論の中から一つの解決を導き出そうというやり方です。でも、このやり方では、とうてい日常生活世界に生きている人々には届きようがないんです。それは「学を積んで」勉強した人だけがわかる世界です。[中略] [そのようなやり方は] 「いまいこ」で差別に苦しみ、「生活」の中で差別と闘っている人々の具体的な体験に、「外部」からもってきた論理を押しつけ、そのことによって人々の体験の意味を無効化することだと思います。[中略] そこには 「いまいこ」で生きている人に対する、はっきりとした蔑視があると思う。」(好井・山田, 69-70 頁。ただし、[] 内は筆者による補充)

- (6) Goffman (1963), p.138. (226 頁)。
- (7) この場合、《他者》は《自己》とは何ら接点のない《他者》としてしか存在せず、《自己》にとっては何ら影響を与える存在ではない。この場合の《他者》とは、現在の包括的な世界に存在はするけれども、《自己》が認識でき得る世界には侵入してきてはならない存在である。ただし、この《他者》の侵入によってもこの《自己》の世界が変容しない保証があれば、その《他者》は出入りが自由となる。

つまり、日本社会で「共生」について語られる言説の大半の前提となっている「日本人」と「外国人」との関係が、その典型的な具体例であろう。

3) 「スティグマのある人」と称される個人像

『スティグマの社会学』に登場する「スティグマのある人」と称される個人には、二つに分けられる。まずは「信頼を失った者 (The discredited)」であり、一方は「信頼を失う可能性のある者

(The discreditable)」である⁽¹⁾。前者は、他者が出会った瞬間にその当該者は「スティグマのある人」であると認識され得るような個人である。後者は、他者が出会った瞬間にはその当該者は「スティグマのある者」であると判断することが不可能であるが、なおかつ他者に知られると「一個人」としての敬意が払われなくなるような情報がその生活史に含まれている個人である。この時点で、大半の人間は後者に属することとなる。前節とも合わせて、このことをまず確認しておきたい。

そのうえで、この個人とその個人を取り巻く集団との関係を以下で述べていく。それは、彼／かの女がある集団のメンバーとして自己のアイデンティティをもち得るのかどうかという記述となるはずである。

a) 他者との繋がりの可能性——「同類 (the own)」と「訳知り (the wise)」

自己を「スティグマのある者」であると強く認識している個人にとって、「この世の中での自分の立場を十分に理解してくれ、自分が人間で“本質的には”ノーマルだという気持ちを自分とともに分かち合える、自分と共感する他者」⁽²⁾の存在はきわめて大きいものである。ゴフマンは、そのような他者は二つのカテゴリーに分類できるとしている。すなわち、第一に自分と同じスティグマのある人々であり、第二に「ノーマルな人ではあるが、スティグマのある人の隠された生活に個人的に深く関わるような特別な状況にあり、その生活に共感する人」⁽³⁾である。ゴフマンは、前者を「同類」、後者を「訳知り」と呼ぶ。前者については次の項で検討するので、後者について見ていきたい。

この「訳知り」にも二つのパターンをゴフマンは用意している。まずは、①医者や看護婦といった、あるスティグマのある人たちの要求に応える、あるいは社会が一方的に押し付ける措置を遂行する機能をもつ施設で働いているときに彼／かの女たちと接する人たちである⁽⁴⁾。次に、②家族といった、スティグマのある人に社会構造上関係をもつ人たちである⁽⁵⁾。特に後者の特徴として、ゴフマンは周囲の社会は彼／かの女たちを一緒にくたにして取り扱うものだとしている。

ゴフマンは、「訳知り」になる以前にその個人はある種の「心の変化に至る私的な経験 (a heart-changing personal experience)」⁽⁶⁾を通り抜けることを指摘している。その「ノーマルな人」は、「スティグマのある人」に共感しているだけでは「訳知り」ではなく、彼／かの女に受け容れられていなければならないというのである。その例として、ゴフマンは次のようなエピソードを引用している。要約すると、「黒人」ではない主人公が、同年輩の「黒人」たちと遊んでいた少年の頃を述懐する話である⁽⁷⁾。

最初「黒人」たちは自分たちのことを気をつけて「ニグロ (Negro)」と呼んでいたが、そのうちに「黒人」同士では「ニガー (nigger)」と呼び始めた。ある日、主人公はふざけている最中に、初めて「ニガー」という言葉が口から飛び出した。そのときに相手の「黒人」の少年はにやっと白い歯を見せ、「この野郎 (You bastard)」⁽⁸⁾と返した。そのときを境にして、その場にいる者はみんな「ニガー」という言葉を自由に使えるようになった。同時に、主人公にとって以前のカテゴリーはまったく変わってしまった、という話である。

このエピソードに垣間見られる、「ノーマルな人」とカテゴライズされるという人と「スティグマのある人」とカテゴライズされるという人とが互いに受け容れ合うプロセスと、それに伴ってすでに確固としてあるものだと考えられていたカテゴリーが崩れ去った後の関係は、「訳知り」に関する記述部分においてはまったく展開されることはない。

前者①に関しては、労働場面における職業人としての接点のみに記述は限定されており、労働場面以外の「スティグマのある人」との関係は示唆さえされてはいない。ある特定の場面内における役割—関係を越えた他者との関係そしてその後の繋がり⁽⁹⁾が、お互いにとって“何か”を生むという現実場面にはよくある事実を結果的に捨象することとなってしまう、せっかくの先の少年のエピソードは宙に浮いたままとなってしまう。

一方の後者②については、該当する個人は、近しい「スティグマのある人」のために多くの「損失」に悩む。しかも、このような扱いに対峙する際には、自らの存在自体を土台とすることによって自らを鼓舞して防御壁とすることもできない。そのうえ、自分は近しい「スティグマのある人」と似た扱いを受けるにもかかわらず、この「スティグマのある人」たちに受け容れられているという明確な実感をもてないという非常にアンヴィパレントな精神状態に悩む存在として、ゴフマンには描かれている。ここからは、たとえ血縁であっても他者を疑うようなやや疑心暗鬼気味な個人像しか抽出されないのではないだろうか。さらに言うと、ここでの個人は「スティグマのある人」が一員にいる家庭内に閉じ込められているかのように描かれているさらいがある。同様な立場におかれた個人同士（体験的に共感し合える生活史を背負った個人同士）は、孤立したかのような各々の家族を繋げるといった拡がりのある可能性を秘めている存在でもあるはずである。にも関わらず、そのような個人の可能性には触れられず、自分を差別する社会と「スティグマのある人」たちの集団の間の隙間に陥って抜けられない個人というのが全体のトーンであるために、ゴフマンにおいては他者との繋がりなど望むべくもない。

註

(1) Goffman (1963), p.4. (訳書 14 頁)。

(2) *ibid.*, pp.19–20. (訳書 39 頁)。

(3) *ibid.*, p.28. (訳書 51 頁)。

(4) *ibid.*, p.29. (訳書 53 頁)。

(5) *ibid.*, p.30. (訳書 53 頁)。

(6) *ibid.*, p.28. (訳書 51 頁)。

(7) *ibid.*, p.29. (訳書 52–53 頁)。このエピソードは、1955 年 10 月にプリンストンで開かれたシンポジウムにおいて、非言語的コミュニケーションに関心を寄せる人類学者 R. Birdwhistell が語ったものである。ベイトソンが報告者となったこのパートでは、人間の認識枠組みについてのかなり錯綜した議論が展開されている (Schaffner, B. ed., 1956, p.171)。

ちなみに、Birdwhistell が「黒人」たちの前で初めて「ニガー」と口にしたときの言葉は、“Don't give me that nigger talk” である。

(8) ‘bastard’ という単語は、「非嫡出子」を表す語として知られているが、この場合は二人称の俗語として用いられていると筆者は考える。また、「混血児」という意味で用いられる場合もある。ちなみに、民族や人種の異なる両親をもつ子どものことを日本社会では「混血」や「ハーフ」と呼ぶことがきわめて多いが、前者は〈異物〉という、後者は〈不完全なもの〉というネガティブなニュアンスがどうしても付きまとっているように見える。「川崎ふれあい館」では二つの文化を備えた可能性のある子どもたちという意味を込めて「ダブル」と呼んでいる。

(9) 例えば、筆者が以前実習に通っていた精神病院においては、医師と患者による趣味の会が定期的に関われており、その場では医師は「先生」であり続けるわけではなく、共に学び合ったり逆に

教えられたりする姿がしばしば見られた。他に、市民運動の場における自慢料理を持ち寄った「お食事会」などにも同様な関係が生じているように考えられる。

b) 「内集団 (in-group)」と「外集団 (out-group)」の間で

ゴフマンのスティグマ論には、《同一個人内における視角としての「ノーマルな人」と「スティグマのある人」》の他にも重要なアイデアが含まれている。「内集団」と「外集団」という二つの概念もそうであろう。

「内集団」とは同じような状況内にある諸個人から構成される集団を意味しており、一方の「外集団」とはそれを含み込んだより広い包括的な集団を指している。ゴフマンが描くのは、「スティグマのある人」個人を基点とした二つの集団との関係である。ここで、「スティグマのある人」同士の「内集団」内部における関係や、「外集団」に属する「ノーマルな人」とされる人との具体的な関係についての記述はほとんど見出すことはできない。

では「スティグマのある人」は、この各々の集団とどのように関係しているのだろうか。この場合、「内集団」とは「スティグマのある人」の「同類」で形成された集団となり、「外集団」とは大部分の「ノーマルな人」たちによって構成されている包括社会となる。「スティグマのある人」は、「内集団」からは政治的表現によって、「外集団」からは精神医学的表現によって、アイデンティティに関する指針を与えられるとされる。つまり、前者は「内集団」を出自とする職業的なオピニオン・リーダーによってなされるのが常であるのだが、他者からの否定的な態度を全面的に内面化する必要などまったくなく、また同時に完全に「ノーマルな人」として装ってはならない、という指示である⁽¹⁾。一方の后者は、実際には彼／かの女を排除・差別している当該社会でありながら、自分自身を「ノーマルな人」として受け容れて成熟した大人になるようにという忠告である⁽²⁾。つまり、「スティグマのある人」は、以下のような二通りの宣告を常に受けていることになる⁽³⁾。

a) あなたは包括社会の成員であり、「ノーマルな人間」である。

b) あなたはある程度「異常」であり、この「異常」を否定してはならない。

このように「スティグマのある人」は、彼／かの女の身の回りの社会を構成している「内集団」と「外集団」という別個の集団からそれぞれに発せられる、ベクトルの異なるメッセージの真っ只中に置かれることになり、まさにダブル・バインドな状況にある⁽⁴⁾。

そのうえ、彼／かの女がどちらかの集団に依拠して、この指示を受け容れようとしてもダブル・バインドな状況に陥ることとなる。つまり、「内集団」は自分と同じ状況の「同類」の集団であるが、集団としての主張を強めていくためにも「ノーマルな人」を装う「同類」を非難する。このために、「スティグマのある人」は「内集団」に依拠すると、現状のままでは対他的に「スティグマのある人」であり続けなければならないという逆説的な状況に置かれることとなる。また、彼／かの女に対して「ノーマルな人」として自己認識するように囁く「外集団」は、実のところ、彼／かの女を「スティグマのある人」に押し込めた元凶であったはずである。こうして、各々の集団の内実とその打ち出す指示とが絡まり合い、二重のダブル・バインドな状況に置かれるのである。

しかし、この二つのダブル・バインドなメッセージは相反するものではないという考えも可能かもしれない。つまり、この「スティグマのある人」に対する二つのメッセージは、まったく矛

盾しない一つのメッセージだという解釈も可能ではないだろうか。ゴフマンが明確にはしなかったこの背後のメッセージは、一言でいえば「ノーマルな人」側の平穏を守るための規範と言うべきものであろう。上記のa) b)に対応させて、説明すると以下のような命令が浮かび上がってくると考えられる。

- a) あなたは現在生活する包括社会の成員として、現存する（ノーマルな人による、ノーマルな人のための）規範に従わねばならない。憤懣を感じて、申し立てなどは決してしてはならない。
- b) 非「ノーマルな人」として自己を認識し、現在の自己を受容しなければならない⁽⁵⁾。「ノーマルな人」になりすまそうなどといった他者を欺く不誠実な考え方に陥ってはならない。

「スティグマのある人」に対するアイデンティティに関する指針は、二つの異なった集団から発せられているように見えるが、彼／かの女に届くときには「ノーマルな人」というカテゴリーの利益のみに忠実なかたちに加工されてしまったようにも考えられる。「ノーマルな人」というカテゴリーからのエゴイスティックな要請にその端を発しているという解釈もされよう。このことは、「ノーマルな人はスティグマのある人と親密に交際しても比較的汚されぬまま、自分たちのアイデンティティへの確信も脅かされることのないままですませてしまえる」⁽⁶⁾という、包括社会が示す“よい適応”の意味に対するゴフマンによる洞察と連なるものだと考えられる。

以上のように、ゴフマンの描いた「内集団」と「外集団」という枠組内に見られる「スティグマのある人」という個人像は、この両集団からの指針によってアンヴィパレントな状況におかれ、自らが帰属するはずであったかもしれないこれらの集団に距離を置かざるを得なくなることに、アイデンティティの統一に深く思い悩む姿である。さらには、先の指針に誠実であろうとするほど、「スティグマのある人」とされる個人は自らを「スティグマのある人」の位置に押し込んでしまい身動きが取れなくなってしまう可能性があることも示唆されている⁽⁷⁾。

註

- (1) Goffman (1963), pp.109-111. (訳書 179-182 頁)。
- (2) ibid., p.119. (訳書 194 頁)。
- (3) ibid., p.123. (訳書 201 頁)。
- (4) ibid., p.124. (訳書 203 頁)。
- (5) 今あるがままの自己を受容しなさいと語るカウンセラーの一部には、現存する当該社会の諸矛盾を当該個人の精神的問題に押し込める危険性が潜んでいることを指摘したい。この意味で無自覚なカウンセラーは現代社会のいくつかの矛盾の隠蔽作業を行っており、すなわち悩みをもつクライアントを次々と生み出す社会の側の片棒を担いでいると言えよう。
- (6) Goffman (1963), p.121. (訳書 197 頁)。
- (7) これは、自らのアイデンティティについて思い悩む中で、その際自己と対峙していると考えられる「ノーマルな人」という現実には存在しないカテゴリーを、実体として認識してしまう恐れがあるからだという考えもできる。

c) ゴフマンの呈示する個人像

『スティグマの社会学』でゴフマンが呈示する個人像について、もう一度考えてみたい。

ゴフマンが描く個人像は、自己に関する情報を操作し、他者に対して情報を制限する個人というのが一般的に把握されているイメージだと思われる。この情報操作が彼／かの女の社会に対する対抗手段であると捉えるならば、ゴフマンの「スティグマ論」は社会システムに搦めとられない人間を描いていると言うこともできるだろう。一方で、それは「同類」として繋がってはいない個々人の各々の営為であるとも捉えることもできる。分断された脆い個人に収束されていくだけの、はかない行為だという判断がなされるかもしれない⁽¹⁾。どちらにせよ、他者と繋がることは自己の中でためらいを覚える孤立した「スティグマのある人」という個人像が、ゴフマンの「スティグマ論」からは抽出されることだろう。この孤立した個人像が、自意識過剰であったり、マキャベリの描く個人そっくりだと揶揄されているものである。ゴフマンの評価とも関わるが、この個人像を自立精神に満ちた、何ものにも搦めとられない強い意志の持ち主として捉え返すことはできないだろうか。ゴフマンが繋がりの可能性をことごとく禁欲したかのように論じなかったのは、このような個人像を心のどこかでモデルとしていたとも考えられる。

また一方で、個々人からの視点からだけではなく、ゴフマンは現代社会それ自体を個人が繋がらない社会であると捉えていたようにも見える。『スティグマの社会学』の中に、アメリカには、一人の恥じることなど何一つない完全な男性しかいない、という記述がある⁽²⁾。すなわち、「若くて、白人で、都会に住み、北部出身で、大学教育を受け、異性に興味をもつプロテスタントで、子どもがいる定職に就いている既婚者であり、肌のつやも良い健康体で、最近何かスポーツで良い記録を出している男」⁽³⁾が「アメリカ人」とであるという価値体系をアメリカはもっていると指摘しているのである。このような見えない理想像が強固にあることによって、私たちは常に漠然とした欠損感に苛まれてはいないだろうか。このために、他者に対して自己の情報を開示することができずに、場面に従って自己のイメージを操作しているとも考えられる。私たち個々人は、このような理想像に自己が当てはまらないからこそ、「スティグマのある人」として自己を捉えてしまい、何とか理想像に近づこうと独力でもがいているのかもしれない。そのプロセスで、ますます孤独に陥っていくことを、ゴフマンは伝えたかったのかもしれない。

註

- (1) そこには繋がっていないと「力」とはならないという前提が確かに横たわっているはずである。
この「力」とは、誰のための、何のための「力」なのかということを「学問知」は明らかにせねばならないはずである。
- (2) Goffman (1963), p.128. (訳書 210 頁)。
- (3) ibid., p.128. (訳書 210-211 頁)。

4) まとめにかえて

この小論においては、ゴフマンの『スティグマの社会学』からベクトルの異なった二つの話が展開されてきたように一見思われるかもしれない。

まず、ゴフマンによる「スティグマ」と「スティグマのある人」について概観した後に、それと対になってきたカテゴリーである「ノーマルな人」には実体など無く、あらゆる人々は「スティ

グマのある人」であるという、ゴフマンの道徳的でありすぎるとも言われる後半部分の“どんでん返し”的な結論を中心にまとめた。

次に、そのことを確認したうえで、『スティグマの社会学』においてゴフマンが呈示した個人像の見直しを図った。その流れからは、集団に帰属することの可能性を構造的に断たれた、誰とも繋がらない孤立した個人が現れてきた。また、一方でアメリカには「恥じることなど何一つない完全なる一人の男性 (one complete unblushing male)」のように文字化されることのない理想像が存在しており、この理想像が個人が繋がる可能性を断っていることも示唆した。

最後に、以上の視点から、現代の日本社会における《私たち》に焦点を合わせよう。今再び聞きたい。《私たち》は、ゴフマンの描いた「スティグマのある人」に自分に近い姿を見出しはしないだろうか。ゴフマンは、私たちすべては人生のどこかで「スティグマのある人」とであると論じたから、それは当然なのかもしれない。しかし、《私たち》は常にゴフマンが「スティグマのある人」として呈示した個人像と類似した自己認識を行い、それに基づいて行為していないだろうか。

この感覚は、「恥じることなど何一つない完全なる日本人男性」という理想像が《私たち》の上にあまりにも重くのしかかっていることに、その源の一端はあると筆者は考えている。それが強固なものであればあるほど、ほんのわずかなズレであっても当人の心中においては「スティグマ」として認識されてしまい⁽¹⁾、ゴフマンの描いた「スティグマのある人」の様相と図らずも似てくるのではないだろうか。ゴフマンは、「スティグマ」とは関係を表す言葉であると記した。しかし、「ノーマルな人」を目の前にしていなくとも、当該社会における理想像が日常生活にびっしりと埋め込まれていたとするならば、個人は場面場面によって「ノーマルな人」か「スティグマのある人」かに移行するといった機会などはなく、誰もが常にゴフマンの呈示した「スティグマのある人」という位置に置かれてしまうことになりはしないだろうか。それほどまでに強固なイメージが《私たち》を覆っているがゆえに、《私たち》は繋がらず分断し孤立したまま、ゴフマンの呈示した個人像に共感を覚えるのかもしれない。

今後の課題としては、分断されているかのごとき《私たち》の微かに漏れてきた声から日本社会における「人間」としての理想像を抽出し、その理想像に向かったの邁進は結果的に誰にとって管理しやすい、あるいは都合のいい人材を育成することになるのかについての分析が挙げられよう。このことは、社会科学においては周辺の領域とみなされやすい「スティグマ論」という“特殊な”テーマの問題ではなく⁽²⁾、「隠れたカリキュラム」ときわめて密接に絡んだ教育社会学的な課題となるものであろう。

註

- (1) 彼／かの女の上の世代の多くにとって、なぜそのような要素が「スティグマ」となるのか理解しがたいものまで、「スティグマ」となることに注意したい。
- (2) 以前から研究が蓄積されている「逸脱論」「ラベリング論」においても、「スティグマ論」とまったく同様なことが言えよう。

(みやうち・ひろし／北海道大学大学院博士課程)

引用・参考文献

石川 准 1992

『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学—』新評論。

- 今井賢一・金子郁容 1988
『ネットワーク組織論』岩波書店。
- 江淵一公 1985
「エスニック・バウンダリーとスティグマーニュー・エスニシティの視角」『文化人類学2』20-33頁。
- 大村英昭・宝月誠 1979
『逸脱の社会学—烙印の構図とアノミー—』新曜社。
- おんな通信社編 1990
『女子高生コンクリート詰め殺人事件 彼女のくやしさがわかりますか?』社会評論社。
- 金子郁容 1992
『ボランティア』岩波新書。
- 小林 甫 1994
「青年層の生育史の把握—生育史と生育環境(家族・学校・職域)—女子高校生“誘拐……死体遺棄”事件の被告Aの事例」未発表。
- Goffman, E. 1959
The Presentation of Self in Everyday Life. Doubleday Anchor. (石黒毅訳 1974 『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房)
- 1963
Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity. Prentice-Hall. (石黒毅訳 1970 『スティグマの社会学』せりか書房)
- 坂本佳鶴恵 1986
「スティグマ分析の一視角—「人間」であるための諸形式に関する考察」『現代社会学22』157-182頁。
- Schaffner, B. ed. 1956
Group Processes. Transactions of the Second Conference.
Josiah Macy, Jr. Foundation.
- 杉野昭博 1990
「障害の文化分析—日本の文化における『盲目のパラドクス』—」『民族学研究』54巻4号 439-463頁。
- 中島 梓 1991
『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房。
- フィッシュ, S. 1992
『このクラスにテキストはありますか—解釈共同体の権威3』みすず書房。
- Becker, H.S. 1963
Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance. Free Press. (村上直之訳 1978 『アウトサイダーズ』新泉社)
- Bellah, R.N. et al. 1985
Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life. Univ. of California Press. (島藺進・中村圭志訳 1991 『心の習慣』みすず書房)
- 山田富秋・好井裕明 1991
『排除と差別のエスノメソドロジー—<いま—ここ>の権力作用を解説する』新曜社。
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸 1992
『メディアとしての電話』弘文堂。